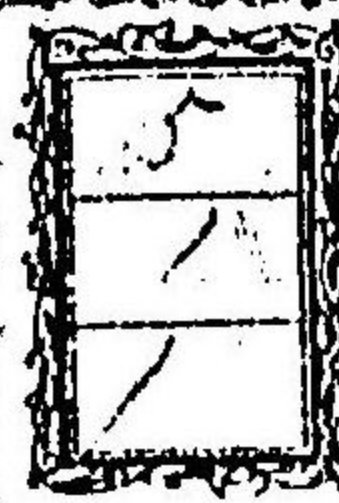


長周長
書長長
門門
金國
匱誌

三
合
冊

[2]



025928-000-6

5-1

長門国誌・長門金匱

村田 峯次郎／編

M24

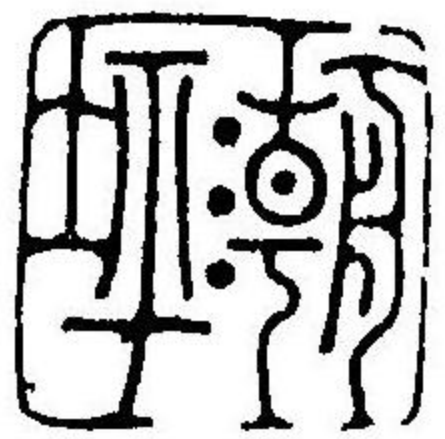
ADC-3502



Nº 382 / XLIV



長周藝叢書
六戶璣題



菽津長門國誌序

聞昔之君子遨遊四方。覽名勝則有圖志之作。觀耿光則有揚烈之傳。使後之與遊觀之思。揚烈之懷者。一披圖志而覽遺編。山川人物。千古八荒。瞭然在目。而宇宙精奇。不至杳邈而不聞。吾儕亦不艱於欲睹之無泛焉爾。故司馬子長足跡半天下。而有史記之作。殆是意乎。余自萬曆己未秋。渡瀛海。涉鯨波。入扶桑之故墟。探日窟之隱願。其間名勝教治。風景土俗。竝雄都巨鎮。不知凡幾。收於胸次。既辛曾冬遊菽津長門國。見其景槩異常。且也鄉圻都市。皆稱其君爲扶桑堯舜。迨親謁其德容。而一種尊賢樂善。敬遠慈旅之輝光。令人感激之無盡。解衣以衣。推食以哺。授次以安。非堯舜而能若是乎哉。益信其民之稱爲不誣。居

大明天啓癸亥
茲者我後水
尾天皇家光
將軍ノ時元
和九年ニ當
レ

歲餘。盡得國步之來歷。風土之美惡。及太守公政治之淳
良於纖悉。因思士也。居千古之下。一窩之中。尚欲游神四
海。揚烈百代。矧朕炙其耿光。親被其殊禮。足歷其區宇也
乎。遂不媿以謏才作誌。亦竊比於子長之意焉爾。若夫編
年紀事。今古鑑錄之該瑣者。自有日國之博雅君子在焉。
余何能贅。時

大明天啓癸亥參禩昭陽大淵獻之歲建寅月人日

武林東瀛子陳元贊沐手謹題于猗猗居

長門國誌目錄

長門國都誌

土俗

太守氏族世代源流

儀表

德行實錄

履歷事蹟

總論一首

讚一首

長門國誌

長門國都誌

陳元贊撰

長門國都。舊名牛敷莊。椿鄉川島邨。阿武松原。阿武郡。沃野。喬松雲密。翠色參連天際。畔海時鳴龍吟。谷口風聞虎嘯。居常見五色霞光。繞繚林際。經月不散。且有甘露降於上。遍掛松梢。色如明晶。和如瓊液。每於天籟長鳴之日。則萬頃松濤。與海波并響。恍如張雲門於洞庭之野。目眩神搖。又如王子登彈八琅於空中。琴師海若奏七弦於水底。有此奇瑞。識者以為仁聖之棲址也。太守因卜都焉。其地東瀕鶴井。引蓬瀛之僊液。西濱玉井。根太華之靈源。指月山背。瀋其北。聳鯨頭。拔地勢。宛然天造金城。觀音寺面護其南。祝祚祉。禁不祥。允矣神司國戶。巉巖獅踞而作壘。襟

帶竟海而爲潢。群僚第宅之維王居者。若布而星羅。圍亘乎畿垣。巨剎蓮宮之翼邦運者。洞春滿願。夾輔乎肘腋。東南其戶。虹梁偃蹇。兩跨湯池。上下其墉。雉堞鬼峨。卑視溟渤。至于宮勢盤空。飛甍夾道。森巖巨麗。範古而模。今赫燁張皇。照天而耀地。城外闔閭之地。土名萩津。鐘鳴鼎沸之家。不啻萬計。貿易繁滋。四民樂荒。熙々然如遊華胥。此固境內之大觀也。若夫道列山陽。上爲京洛之咽喉。關截小倉。下連周防之體腹。險隘四塞之路。迴羊腸而踴日。駸峨萬仞之壁。排霜劍以當豹關。若使一夫守之。真可萬夫莫敵。兼之銀坑銅穴。充擬其中。粟米魚鹽。甲於天下。則又富強之雄圖也。以故作都于此。亦取詩之秩秩斯于。幽幽南山。如竹苞矣。如茂松矣。之義焉爾。然松有長春千載。久

國似之。昔大宋遷都于杭。而營城于萬松嶺。又有長門殿。松門郡。皆此意也。因改阿武松原爲長門國。豈無自乎。迄今太守之壽考而昌。子孫之秀茂而光。寔基于此。地靈人福。蓋可知矣。

土俗

是方地逼北海之滄。冬時大寒。連旬風雪不絕。民多疾癘。居室低陋。垣壁皆以砂土。蘆葦爲飾。覆椽以木片。草絢細竹爲瓦。食惟魚鳥兔鹿。柿柑之果極多。華卉藥苗之種甚盛。山哇肥瘠相半。東去一里餘。名松本。朝鮮倭民居之。以甄陶磁器。城南平安戶市之水味鹹。飲者生渴。用鐵錢煎餅銀。習俗皆好學工醫。人多善良而禮義。淫污竊盜之事。比他國稀少。但鄉市傳聞有狗魅夜出。蠱人。師巫用呪水。

長門國志
禮之即去。不至爲害。歲時七月望夕。則有舞躍之戲。以中元爲上元。大張燈火。而作歌樂。其貴介公子。則蹴鞠放鷹。馳馬試劍。縉紳儒釋。則聯歌賦詩。無論貴賤。率通書理。婚娶喜悅。年少。喪祭尊尙佛教。其音語和平而不俗。餘列國盡同。

太守氏族世代源流

長門太守公。毛利氏。諱輝元。法諱宗瑞。廣島君光祿大夫。備中守之子也。遯其世系。出自人皇五十一代之平城天王十五世之神孫也。娶安藝□□之女。穴戶南爲夫人。又納兒玉氏爲次夫人。誕育世子二。郡主一。早薨。諡榮譽周慶夫人。長子長門守。諱秀就。次子日向守。諱就隆。郡主諱□□。尙吉川美濃守。

儀表

太守公陰陽目。方頂圓唇。豐頤盤帶壽。地閣肖天庭。四瀆環應。五嶽來朝。右額角有長庚呈痣。起坐端肅。氣度冲夷。神情淵穆。望之温然。即之儼然。音出自然。年逾七十。真氣愈茂。童顏益春。終日酌對民物。了不作衰態。蓋天爲貌。道爲容。得於澄練脩養之功居多。

德行實錄

太守爲人推誠以待下。信任而愛人。元老大臣久司密勿而不疑。度才量用。禮士尊賢。臣下有疾。不難親往以視之。不啻如手足也。四方賢士遊其國者。悉優待之。臣民微眚。詿誤必寬赦之。敬遠慈旅。薄歛輕刑。視百姓如子。體悉疾苦。軫念災瘼。救護之無所不至。故人皆稱爲扶桑堯舜。至

於晚年。祝髮歸真。聲色貨利不使形于聽睹。便嬖讒諂不使立於左右。唯從政治之暇。則聯儒臣以講究古今治道。雖日晏而不輟。

履歷事跡

其先都廣島。領國十三。山陽道備前備中備後安藝周防長門。北陸道出雲石見因幡隱岐伯耆。及西海道豐前。南陽道伊豫。扶桑半壁之天下。皆歸統轄。世澤相傳數百禩。垂及慶長間。與江戶先將軍樣。競宇大坂。互有玄黃。既而惻然嘆曰。土地者本所以養人也。今以土地之故。而驅赤子於鋒鏑。是以養人者害人也。因請退守周防長門二州。以全民命。效周太王遷岐之故事。乃囑其耆老而告之曰。予不忍以土地之故。而遺害汝等。將去廣島而遷都長門。

二三子何患乎無君。廣島之民皆感泣之曰。吾君仁人也。不可棄也。扶老携幼相從者如歸市。

總論

論曰。日東之國。類皆寡仁鮮義。棄禮滅信。以多殺爲善治。以拮据爲良才。以欺詐爲智略。以爭雄必勝爲君長。以詩書理道爲土苴。夫如是。則有草菅其民而已耳。其孰能輕刑薄歛。赦過宥罪。救災恤難。體其疾苦。且遷國以保全。而視之如子乎。則有瓦礫俊彥而已耳。孰能去讒遠色。尊賢用才。各當其任。而優禮四方遊士乎。則有陵轍臣下而已耳。孰能推誠待用。親往視疾。視之如手足乎。則有糶糶聖言。鼓馬金戈之爲尙已耳。孰能聯師儒。虛心講究古今治道。竟日而不輟乎。則有搬土啓疆之注念已耳。孰能退請

二州。在德不在廣。大乎。惟太守獨能度越之。不墮倭風之陋習。而曲盡爲君之大道。可謂拔乎其萃。遊方之外者矣。中庸曰。故大德者。必得其名。必得其壽。今太守各有堯舜之稱。而齡邁耄耋之數。至德休徵。不其彰較著乎。吁。安得盡日東之國之君。如太守之仁。使斯世斯民皆被堯舜之澤也哉。

讚

贊曰。天元垂精。東海降靈。誕育仁睿。加念蒼生。任賢使能。揚光泰清。敬遠慈旅。遐邇化行。退守二邦。涵量八溟。典謨訓誥。講式政成。唐虞比德。置父同聲。天潢之派。胄衍神明。容盜純粹。齡邁歲星。空谷扶桑。永世作程。

長門國誌終

右長門國誌は明人陳元贊の撰する所あり元贊ハ明の萬曆年中に生れ崇禎進士ニ落第す遂ニその國亂を避けて本邦ニ歸化しとより又か元和の末途次長門國の萩府ニ來游するもの久しこれ其時の作あり後ち尾張藩の聘に應じて彼地に投寓す正保萬治の頃或ハ京師江戸に往來して諸名家と文酒の交を結ぶ元元唱和集これその一ありまた尾州陶器の中に元贊燒の名を傳ふるものあるハ實ニ元贊ノ遺製とすその多能また一斑を窺ふニ足れり元贊ハ是書余曾て古謄本を得る然れども書中文字の謬寫脱落等往々讀むへからざる所ありたまた山口縣廳元贊の眞筆の原稿を藏すると聞き往年一

友人を介して屢々拙本の校合あさんことを請ひたれども遂に宿願を達するを得ず仍て這回との書より原き丁寧に謬訛を正して印行せり江湖の諸君子幸よ善本に據りて訂正せられんことを希望す
明治辛卯二月既望夕風雪窓を撲ち燈火滅せんとするるとき東京四家郵愛古堂よ於て看雨隱士識

長門金匱

一輝元公御代公方秀頼公と家康公と御取合之砌秀頼方をあされ關ヶ原御人數被出依之御兩國の太守と被爲成候其節の物沙汰み藝防長三箇國下さるへきやの通りに候處井伊掃部殿の本多佐渡守殿か被仰に藝州へ本國よて御座候その後依忠義可被遣候尤長防被遣可然との御沙汰に依て右之通に候但この儀家康公へ三箇國可被下旨候處に秀忠公二箇國と被仰候由のこと

一慶長六辛丑春伏見より直さま防州山口へ被遊御打入候是を藝州より御打入と云此年秀就公ふは伏見より江戸へ御越あされ候御歳六十歳なり此時輝元公御法躰被爲成宗瑞と御改候あり

一御城地之儀防州三田尻よて桑山を要害に被仰付御城可被仰付やとの御事に候處桑山へ山上水不自由に付三田尻の御繩へ止申の由就夫山口へ可被

仲付どの御事にて龜山に堀まで出來の處へかの地へ大内家數代の城下異國までも其名高きにつきいかゞとく被思召長州萩の地を見立被仰付其節萩への外田舎にて川上より今の御城下まで竹木茂り堀内より濱崎までは松原ふて阿武の松原と云て日本名所記に知れざる處あり依之この松原を同郡大井村へ御移させなされ此地を小萩と云さて萩の松原御城山との間汐水兩方へ通り中筋へ砂を巻あげ汐の引に御城山へ歩行にてまゐられ候あり其前を御埋させなされ今の四本松有之所也彼城地蓮池餘り深き淵にて埋め殘しの處あり此地へ古き萩八景よ得江歸帆とて云傳り今の御藏元有之所より四本松蓮池まで入江のよし

一御城繩張東の方へ吉川如兼礮西の方は毛利宰相秀元公御繩張あり石垣御手傳ハ御家中の歴々へ仰付られ入目出銀分限相當に受切に仰付られ其節歩ハ足輕中へ土持被仰付候依之今以足輕ハ肩の上不被差免候御家中大小

身其外末々御普請彼沖埋人を日々差出然處に寶永年中穴戸玄蕃當職役より半知御馳走ふ付被差留候其節一廉の所調へ被申衆へ其所の大石よ其人々の名彫付有之

一橋本川片川堀立元和八年

一只今の深野町へ其比までハ只今の御本丸の傍よ有之候而深野と云町人居住仕り候あり今の深野町ハ是より前漁人朝鮮陣の節舸子役に參り後此所まで歸りて住宅仕由此者共を小畑へ御引せなされ是を今浦と云彼深野か地被召上候て右漁人町を深野町と云由深野屋敷へ御本丸の内にかり御居間の御疊御初入國御間に合不申に付深野の疊御敷かせなされ候依之今以深野より御初入國にハ疊獻上候深野か地の印に深野町と名付御立被成候由一萩の地は大内家時節吉見氏の領知の由あり御城山よ洞春寺妙玖寺御建なされ候御事ハ彼兩寺の上に吉見殿廟所有之此所に指月山善福寺と云寺あり

り彼寺今ハ川島ヲ建之との古跡ハ依テ兩寺を建立被仰付候段洞春寺長老
積祐物語の由

一當所を萩と申事ハ今古萩と云所ハ人家あり今の田町通りより南東ハ皆沼
よて盛原の水溜りあり田も耽々無之よき道もあし東北の方當萩村と云後
總名萩と云也本の名所を古萩と云なり

一慶安年中水田の中へ中道出來候て慶安繩手と云沼田の中ハ新道被仰付候
又中道是を田の中へ被仰付其後田町唐樋町出來候なり今唐樋町の橋をき
つけう橋と云ふの所に唐樋有之水通ハ相成候を毛利市正殿當役の時新道
辻南北へ田町へ通りの田中道出來申候其後新堀出來申候よし

一萩を世人當島と云河上水西北へ分き口の名を川島と云夫兩方の川内の地
ハ河島之庄と云^{手木の庄}依之萩にての諺ハ當島と云萩ハ河内の島なり

一往古只今の田町より東南ハ水溜にて道もあし無之ゆへに往還ハ松本

市より上野通り龍藏寺の下より船よて渡り吉部原^{南明寺の下あり是を陣ヶ原と云}通り小松
江通り大照院の下より玉江阪へ通り申候あり松本より遊行上人廻國の時
の道あり松本より萩への道ハ只今松本橋の東市際まで水入の澤よて候を
毛利隱岐殿職役の時松村長助とて農人に開作被仰付土手道を付今の橋の
所へ船渡有之この所を今松村開作と云今の橋佐世主殿當役の時橋にあ
るあり

一御打入の時分より松本渡と場櫻江渡と橋本口古萩口に物頭屋敷を仰付ら
れこれ役屋鋪也

一松本渡と場より梨の木町山中町筋より十日市御許町へ出るあり黒澤繩手
と云ハ黒澤丹宮屋敷前道あり是又佐世殿役中此處に四方え新道出來

一土原と云ハ松村開作の時古川節開作成新川筋の土をこの所へ上げ候ゆへ
右の名を云この所並木に梨の木有之依之名とす山中町も北の詰ハ山中市

左衛門住居故に名とす

一唐樋町と橋本町の間ハ諸士屋鋪也元祿年中毛利市正殿當役中町よ成御許の町と云

一往古地面ハ寧徳寺の守護荒神社有之候を田中一本松へ御引せまされ候この一本松の處ハ伊豫八幡社御建立有とありこの八幡社を古春日地へ御引せ被成候其跡へ荒神御移まされ候かり荒神宮立榮候まとの益田織部殿當役の時なり往古ハ松一本有之小きす、め堂有之あり

一新堀に松植候ハ益田織部殿當役の時享保五年なり

一御藏元の下より濱崎まで濱邊に松植候事ハ浦圖書殿當役中植る

一御舟倉並御舟出來候事ハ毛利宮内殿當役中毛利市正殿當役中までの閉勝
一閉田權左衛門濱崎浦手代官役の時相調候

一越ヶ濱往古ハ殊の外深山ふてけや木あと澤山に有之その景地能所あり勝

閉田權左衛門役中御茶屋調申候

一江向と云こと地名なり往古萩と云は古萩の事也夫より南の水溜りの澤江にて候ゆへ萩の方より江の向と云事也又地面と云所より龜ヶ淵の江の向ひかれハ地面の方西の方を江向と云是古き屋敷打渡とに在

一片川町は御堀の上に掛作り被仰付其節ハ一方堀にて片ヶ輪町よて有ゆへ片かハ町と云後掛作りに被仰付候總門通りハ橋有之候由是を土橋に相成候北の總門の北の方ハ汐打こみ候ゆへ築留に相成候

一大手三の總門並大馬場より入候道の角之銘々の屋敷に矢倉長屋あり修補の時ハ公儀より入目銀被仰付候尤三ツの總門虎口升形事至り其節調候由土手の上に矢倉仰付られ候へとも除させられ候

一總門の左右の竹指物竿篋火繩竹に御植させなされ候

一橋本筋の川ハ往古ハ霧口螢火山の下より流れ出候是を古川筋と云この川

堀替られ候ハ御開作ハ相成この見合都合人笠井孫兵衛也依之笠井開作と云也

一橋本川北の方土手高く相成候ハ佐世主殿殿當役中松本川筋一同に土手ハ相成候元祿十五年同十七年大木にて米屋町まで水上け申候に付て如此候一堀内春日の社は本江向古春日地にありけるか堀内へ御引せなされ候此所へ豊國大明神を被成御建立候御下心ハ候得共天下向あらく聞へ候故この春日を御引せなされ候由太閤の御影をハ洞春寺へ御預けなされ候この春日の社の地は往古大宮八幡の祠有之候由本社ハ大宮八幡也古春日地ハ柳澤監物ハ被遣候へども騒々ときゆへ御断申出堀内今の屋敷拜領ありこの屋敷跡へ田中に有之候伊豫八幡社御建立あり元和六年一本松江ハ地面の荒神御建立其跡諸士屋敷に相あり候

一雜式町より大照院の下までの道は泰巖院様御逝去以後御家中御寺参りの

爲に仰付られ候也

一松本新道ハ東光寺門前まで新道出來申候是ハ駕籠道と云

一松本大橋の下より鶴江までの間半分ハ地方之方湯淺小右衛門萩代官役鶴

江の方勝間田權左衛門濱崎代官役の内調之御開作ハ相成候

一太鼓腕の脇を梁瀬と云ハ鮎を取とて秋中昔ハ梁をかけ申候故や瀬と云

説あり又古老の物語に中津江の方川端ハ押なへて河柳有けれハ柳瀬と云

説もあり

一往古萩八景と云所ハ

兼江夕照鶴江あり

鐘江秋月玉江川尻

藤江落雁佐世屋しきの所なり

萩津江暮雪今漢崎浦ある脇あり

得江歸帆御藏元の所あり

三江晴嵐金谷古天神

二江夜雨渡り口の橋の邊

柳江晚鐘にこりぶち

佐世屋敷ハ元岩國屋敷云所ありとの説あり

一後に云萩八景詩は山田原欽歌は安部吉左衛門春貞よ命す

上津江晴嵐

上津江上歛秋霖度嶽嵐光浮即沈旋與扁舟傍灘落日登丈五翠猶深
山川の瀬々の朝霧絶く江の水みへて行嵐かき

中津江夜雨

雲氣四山横渡頭雨暗生蕭然不能寢一夜打簾聲
更る夜の雨の降江の賤の家に残るも細き燈のかけ

下津江落鴈

旅鴈秋高停不征一汀水氣接天晴問渠緣底漫來去不堪雲江萬里情
有明の入江の蘆のほのくと明る空より落る鴈かね

鶴江夕照

斜陽宜囀網一半鶴江紅島影委波永寒潮湧遠空

鶴のある入江の海の松原に残る夕日のうけの閑けき

倉江歸帆

地抱遠天三面開水漫數島一帆廻倉江風熱潮生駛疑是仙查銀漢來
遠島や波もひとへよみとりある空より出て歸るつり船

玉江秋月

玉江一片秋明月入清流夜靜人回首漁村煙霧收

江の水のまつく影さへ白玉を琢くはかりの秋の夜の月

櫻江暮雪

雪滿櫻江更向津晚來舟子訝行人風回偏惜入江碎楫轉何妨厭笠頻
白雲の夕の色はやまさくら江の波うけてちるかこそみる

小松江晚鐘

斷霞夕竹峯深寺度疎鐘漫々春江水平吞樓外松

山の端も霞渡りて遠き江の松よりつたふ入相の鐘

長門名所の歌

長門にも赤間の關に宇津井瀉豊浦赤野に浪のうら島

但赤間關と云へ下の關赤野とは和布刈の事也浦島へ沖津平津也沖津には満珠平津に干珠を納め給ふ夫より已來はこの島を干珠満珠と云赤間關門司關古へ五百壇の沖長門地につきたる處あり神功皇后異國御征伐以來海流通とや依之門司關今へ豊前なり一里の海上汐相の漲所也和布刈にハ今以毎年十二月晦日の夜半に社人海底に入和布を刈て神獻す堤をへ豊浦の宮に築こめて豊浦の宮の豊られよのし

但長府に一ノ宮二ノ宮とて崇奉る也仲哀帝神功皇后なり

千はかちとや心つくとも年を経ていつともあらぬ阿武の松原
金長家
陸奥の思ひ信夫に有あめら心にかゝる阿武の松はら

新六
長門ある阿武の郡の杣木とて唐人もすさめさりけり

長門ある阿武の松原かき分て指月の月は何と成らん

但指月とは今の御城山なり

長門ある三位の浦や二位う濱一位か嶽を登りてそ行

但三見と云ハ誤也二位か濱飯井の事か一位か嵩俊山にこれあり

奈古の浦に釣する海人の漁火を賤の浦人星のとそみる

但賤の浦へ通ひ浦あり

人丸
向津の奥の入江の漑は海苔かく海人の袖やぬきはん

但この歌は淨土宗人丸寺にあり

貞信公
堤をへ豊浦の宮よ築こめて世々を経ぬとも水へ洩さす
顯季
播磨瀉恨みてのみそ過ると今夜宿りぬ阿武の松はら

春秋の雲井の鴈もとめ得ぬ誰玉章のもしの關守

是よりハ門司關往古長門路に續きたるゆへ長門の歌に入
硯きる前の細道仄暮て薄く書をす門司の玉章
旅人の心盡の道なれや往來ゆるさぬ門司の關守
戀すてふ門司の關守尋てきつらん心つくしに

防州の歌

四本社植つる物を生添てまり府の浦の松の村うへ
但鞠府の浦へ三田尻桑山海邊なり此所に櫻御所とて足利尊氏の御陣所有
豊後石と云名石大友より賄り給ふ今に松原の内にあり此歌天神の御詠歌
と云又云尊氏の歌と云和泉式部共云勝閉の浦と云岸津の事也琳聖太子初
て日本へ渡海の時御船この所へ著と云多々良郷と云ハ國衙年禮の邊と云
も岸津の事か

周防ある黒髪山の噂をハ櫛の濱にてゆひやそめけん

室積や竈門を過る船おれハ物を思ふのこかれてそ行
周防ある岩國山を越ん日ハ又もや頼めあらしうの神
草枕旅行人を祝ひ島幾夜ふるまていこみきぬらむ
いつも唯見んと思ひと阿波鳴門よそにや越んあふよともあな
筑紫路のかたの大島暫くもみねハ戀とき妹置て來ね
鞠府より筑紫路へ出行人の右田の嶽といひや染けん
周防なるまひか丸山を過行ハ秋の風社身には入けれ
但秋の風ハ安藝の風の兩義を兼なりと云
長門にハ赤開關に宇津井瀉豊浦有るは時のうら色
此歌を以て寶永四亥の二月廿五日御城内天神御社御連歌御發句御代句仕
る 安部信貞

名もあるや世と春ふあふ時の浦

如此仕り候也最前書付候歌と同事よて下の句少し違ひたり孰か本説
と云事を不知又時の浦の事今御藏元有之所の由也是を得の浦と云た
るとも云往古彼所を得ヶ江と云いつれの正説不明

一周防國玖珂郡柏崎と藝州との境よ小瀬川の末昔より論有之所よて平清盛
詩歌あるよよりて周防の地となるなり

柏崎流れて遠き鹽路まで玖珂の浦半よ歸る夕浪

一首詠吟傳不窮清盛聲續及東西藝陽分地止論口柏崎元來玖珂中

一長州大津郡倭山ふ狗留孫山國護院觀禪寺俗に御堂と云出陽あり

一防長神社は周防十社長門五社

玉屋神社 大崎の一ノ宮 劔神社 右田にあり

出雲神社 徳地一ノ宮 二股神社

仁壁神社 山口一ノ宮 熊毛神社

勝閉神社 岩城神社

以上十社

荒御魂ノ神社 大二座 小壹座 村屋神社 長府村屋と云所 玉依姫と云

忌官 二ノ宮

以上五社

一萩椿村に多羅寺とて有之今ハ永福寺と云この寺下の村を多良村と云

一御當家二月の十五日上下著用せさるハ慶長九年九月十五日關ヶ原御陣の

節家康公と大坂公方秀頼公御合戦大坂方不宜同十六日の御陣にハ毛利秀

元公天野元政公芝居を御ふみ留被成候也十月二日防長兩國にならせられ

候右十五日ハ御不吉につき宗瑞様已來月の十五日の式日を御祝不被成上

下著用不被差免然る處に吉元公御代よあり式日の御祝儀有之夫より以後

末々まで肩衣を著用候朔十五日廿八日同前にあり月の登城有之

一御一門六家と云ハ

○穴戸隆家主御室御家

○毛利元康公御家

○毛利元政公御家

○毛利秀包公御家

○毛利元氏主御家

○毛利就頼主御家

一八家と云ハ右六家ハ益田越中主御家福原越後主御家也益田ハ隨身あり福原ハ御家老あり

一大組ハ御打入の時六組有御一門六家御預りあされ其後八組に仰付られ候而益田福原兩家を以八組よ成是御一門家御八家と云大組諸士を八組と云因之大組の頭と云ハ八家の事あり千五百石以上の衆を以八組の諸沙汰仰

元就公御男天野元定家御相續

元就公御十一男始小早川隆景公御養子後從太閤筑後久留米被下久留米侍從と云

元就公御二男吉川元春御二男にて初三浦家を御相續

吉川廣家主弟三男吉見の御家御相續廣頼公隆景公御養女御室あり妙悟様なり

付られ候を八組頭と云是一組々々之組頭あり番頭有ハ右の與中の御城御番勤在勤の沙汰被仕故番の頭也御手回頭ハ殿様御側に被召仕衆中の諸沙汰被仕故手廻頭有依之八組頭御手廻頭とはかりハ不謂組頭と云事古來の法也

一足輕頭の事只今の頭を足輕共の組頭と云ことあかれ是ハ本頭也自然の時ハ外子組を御付あされ候由組中廿一人ハ足輕組と云者なり足輕頭あり因之足輕共頭と計云て組頭と云ぬこと古來の法也大頭と云て一人被仰付候ハ常に足輕頭廿一人の都合役にして常に足輕共の仕役の沙汰仕候役人を置役目算用を調數多の足輕役目の甲乙沙汰所並二十五人の頭中の諸沙汰取次所也是を足輕の大頭と覺ゆることあらし物頭廿五人の大頭と云もの也

一大番頭衆も諸士中のことを組頭として相組衆と被申事古來の法也自分も

身柄寄組にて有なから御役にて大組より成被申也依之大番頭一組々々の帳の頭に組頭の名並分限をも書加候事古來の法也然ハ組頭衆大番の士を組の衆と被申事なかれ足輕の組の者と云てよきあり

一御當家を越前家と云事は結城中納言秀康公松平御家御宗領也御子様方一に一伯様松平越後守様御家越前宰相松平越後守様御家龍昌院様松平長門守秀就公御簾中松平出羽守様松平大和守様松平但馬守様右の通にて其上段之御重縁につき御當家御一門越前家と世に云

一御城御普請の材木の萩廻り霧口川上佐々並邊の間に御切取せよされ候此邊殊の外大木多ありとそ

一吉廣公御代に江戸御城御普請役被仰付候元祿十六年癸未十一月廿二日の夜江戸大地震にて御城の石垣壁破損し付同廿八日右の御修復御手傳被仰出候西丸不殘外櫻田御門半藏御門田安御門年内片付可被申付候竹橋御門

同前松平大膳大夫様この外に松平右衛門督殿立花飛騨守殿戸澤綱介殿丹羽五郎三郎殿加藤遠江守殿稻葉能登守殿この御衆中へ諸所被仰付候此御方御請場の内を外櫻田廻り御石垣を吉川勝之助殿へ御分被成候而被仰付候御木屋場へ外櫻田御門の外に被仰付勝之助殿木屋場も同所ふて別に此方より仰付られ候此御方御普請惣御奉行へ穴戸丹波殿國司式部殿其節江戸兩當役にて候故御承され候事

一關白秀吉公の時五大老ハ

家康公

八十萬石

加賀大納言利家公

百廿二萬石

安藝中納言輝元公

四十八萬石

備前中納言秀家公

七十萬石

筑前中納言隆景公

一慶長五年九月廿三日輝元公大坂の城御明渡なされ候境より御船にて直様
藝州へ御下被遊候由

一油井正雪一派の者江戸品川よて礫よ仰付られ候節西國御大名衆中へ御見
物あされ候様被仰出候而諸家より棧敷を掛申候此御方よりも御棧敷仰付
られ候而千代熊様御出あされ御見物あそへされ候

一綱廣公御病身に付御下國不被爲成元千代様御幼少にて御下國不被爲成に
付萩え上使として御旗本より兩人宛三番手にして被差下候

初手 石丸石見守殿 石井彌左衛門殿

二手 山田清大夫殿 齋藤左源太殿

三手 水野藤右衛門殿 熊瀬小十郎殿

一吉就公御逝去に付て吉廣公御養子とならせられ候其節御下向年よ當候得
共二月に吉就御公逝去にて吉廣公御入國不被仰付翌年子れ年御入國被仰

付候依之戌亥兩年の閉御國へ上使兩人被差下置候妻木彦右衛門殿山中五
郎左衛門殿兩人也御宿は堀内毛利若狹殿屋鋪に妻木殿山内縫殿殿屋鋪に
山中殿あり

一去る老人控に宗瑞様御代當職役佐世宗孚三井但馬守藏田豐後是ハ盛所
本行と云右
兩人の檢地の時七ツ三步平ららに成御兩國之太守五十三萬石但最前御拜領
石高ハ廿九萬
餘石

一福原越後殿を以本多佐渡守殿へ御伺あされ候處よ黒田筑前守福島左衛門
大夫へ問合此衆の檢地の並御伺可然との御内意也大夫殿へは其節の御仕
置萬事手荒成物音よ付て御問合無之但筑前の平らハ貳ツ三步上り當るか
一筑前へ御問合なされ候へともかの國跡出繼に付て最前の總高に貳步三朱
程へ上りにして三十六萬九千四百石の平ら高なり此高は右の御内意よ依
て廿九萬石の高に貳步三朱と大掠了を以被成御上候故天下への御披露計

よて御帳にハ無之然共御兩國の繪にはこの高書付申候

一五ツ成高ハ寛永二年毛利申斐守様御仕置を以益田牛庵清水美作奉行但檢
帳仕立をハ熊野兵衛ハ被仰付候
この時惣高六十五萬石にあり

一宗瑞様御隠居は元和九年癸亥年と見ゆる

一福島左衛門大夫殿へ藝州拜領被仰付に依て彼方より此方へ前々年の所務御返納候様にと被申掛候得共御兩國にあらせられ候てハ御返納不相成候又其分よてハ大夫殿御承引あく以の外御難儀被遊候儀にて成兼候附益田牛庵推參に存寄被申上御兩國之内一郡御引渡候而御返納米相濟候よていづれも引田に成され候とて御斷被仰可然と被申無餘儀思召其分ハ御理候て大島郡御引渡一兩年御返納あされ後宍道五郎兵衛を以算用差引のため大夫殿へ被遣候節に大夫殿も御相對あされ候由其後にハかの者働にて相濟候こと宍道を節々福島殿被召寄御相對あされ候或時左衛門殿酒吞申さ

れ候哉と御意あされ候へは宍道儀私儀爰元御城下に罷越酒共給不申てハ外ハ氣無御座の由申候御盃出大酒にて其後大面鉢出され候是にて一ツ給申候へと被仰候て御さしなされ候戴きて候一ツたべ申候左衛門殿被仰よ又々一ツ給候へと被仰候宍道申様ハ此度算用旁の氣晴一ツ給可申候左衛門殿被仰に一盃吞候へは算相濟し可申候と被仰候一盃吞して後福島殿帳面取寄候へと被仰御判被成被出候宍道申様に難有奉存候左様にハ又々たべ可申とて二盃給申候福島殿も上戸ハ而御座候宍道ハ後に死去仕候と古人中傳候事

一山田吉兵衛後下總宗瑞様御代より出頭不仕候然處ハ御上洛の時御納戸役ハ宍道五郎右衛門被召連候五郎右衛門其節迄ハ年若に付自然之時の御用ハ御納戸銀貳百貫目御置有之候へとも五郎右衛門支配に不被仰付功者役吉兵衛へ御預あされ候就夫其算用方に渡部又左衛門山田利助と申者兩人

御付あされ候御在京中に此仕置銀有之段上方の町人承り及び右兩人へ談
し和市利のため百貫目御預け候様よと申候て取出し横よ成不相調候故吉
兵衛御供よて被罷下候付御跡に二三ヶ月滯留候て沙汰被仕候へとも不及
手被罷下候へハ右兩人御國の様子承合萩著の夜則走り申候依之吉兵衛不
被存儀あきよよりて知行被召上數年明木村よ引籠居被申候左候て千石物
成高を以年々被召上候差引被仰付候へハ百貫目の辻相濟候ゆへ甲斐守様
御沙汰の上八百石として被召出前々の分よ御老中御寄合の列座被仰付候
後五百石本家三百石山田長兵衛へ分け被申候右の故下總家に安藝以來の
記録御用物諸扣有之筈あり

一寛永十一年の御上洛ハ大猷院様御代替よよつて諸家へ御判物御朱印改被
差出候時節益田牛庵上京仕居られ候て甲斐守様日向守様御朱印分り申筈
に候處よ酒井讚岐守殿御宿へ參土井大炊頭殿御一座にて中納言様藤七郎

様へ被爲對御兩國御相違有ましくとの御誓紙を見掛御目被申立候土井様
酒井様其時淺野因幡守殿三原を分被遣候例を被仰立候處に御當家ハ兩
公方様より中納言父子へ當る御誓紙之趣藝州の並とてハ違ひ可申と被申
詰候よ付重て御沙汰の上無相違被仰出候此段牛庵別而忠義にて候

一宗瑞様御一亂以後初て御國へ御下あされ候て山口の糸稻お被成御座系米
云萩を御城下よ御取立あされ候付諸事爲御見合初て萩へ御越あされ候時
は常念寺を御宿よあされ候常念寺其節までハ古萩宍戸民部屋敷あり

一慶長五年子關ヶ原御陣あり今年御屋あき様御出生依之御名をれらん様と
申候よし

一大坂冬の御陣ハ慶長十九年御和談よ成翌元和元年夏の御陣ハ大坂落去五
月七日あり但其節の事古人の咄に其節長雨にて武具馬具くさり申候中に
も馬の泥障皮よて調候分ハくさり候て用立不申候少くさり候分ハ天

長門藩書
氣よき時節へそりかへり用ゝたへ紙縷にて調候分又藤組杯にて調候分
へ一圓くさり不申候あり

一慶長五年より七年迄は宗瑞様伏見に御座なされ今森法印屋敷へ御移被成
元御屋敷は被召上候其節藤七郎様にハ伏見より江戸へ御登り宗瑞様ハ山
口系稻へ被成御下佐世宗孚ハ慶長五年より在山口よて萩の御城御取立の
御普請被仰付御普請ハ慶長六年春より御取掛候て同九年甲辰の秋御成就
山口より御入城也

一井原五郎右衛門元光當職仕候者宗孚元嘉巳後三井但馬元信井原孫左衛門
元歳三浦内左衛門元澄榎本伊豆元吉又但馬守再役仕候處ハ御國中在々惡
年打續御逼迫非大形候付限有衆當職不被仕候につき可被成様無之ハ付先
當分の御用の様に三箇年被仰付候この時の御借銀三千五百貫目出來御難
儀に相極候ゆへ宗瑞様元和八年毛利甲斐守様へ御仕置の儀御直に被成御

頼候得共御請無之其年甲斐守様江戸御參勤につき翌年宍道主殿殿を御使
よて江戸へ御登せなされ彌御頼なされ度との儀に付毛利甲斐守様へ御下
向にて其秋より益田牛庵清水美作へ御仕組被仰付候都合を甲斐守様被聞
召御改有之宗瑞様へハ牛庵被申上諸事下仕置に牛庵存知寄出御仕組調ひ
御仕置銀まで出來申候然者甲斐守様へ御頼にも不及牛庵計ひみて相濟御
事に候へとも宗瑞様御隠居なされ候付此儀を甲斐守様を以爲被申の由也
但御逼迫ゆへ其節當職を限有衆不被仰付と云説有之宗瑞様御直よて御
詫強き故限有衆へ被仰付とも限り有衆夫ゆへ御請不被仕と云説あり

一牛庵御仕置銀千三百貫目小判三千兩大判百枚阿川砂金牛庵仕置よて御借
金を相調御仕置銀にて出來候事莫太あり

一宍道主殿殿當役の時銀三百貫目御仕置出來申候

一寛永十年の六月中國へ上使市橋伊豆殿棺松平右衛門殿村越七郎左衛門殿

是古人扣の内なり

一椿村八幡宮の社頭に祇園の小社有之是ハ八幡勸請以前より地ハ一國一社の社地なりこの社同國大津郡瀬戸崎に移すとあり其跡へ河上ハ梶原平三勸請の八幡之を御打入之節此所へ移す大祇園の小社有之を取建近年參詣有らば享保辛巳の年より八幡の馬場末に借の殿を調へ六月七日より同十四日迄御輿を借殿へ御幸をふして祭を始る也此年祐巖院殿御逝去に依て御中陰過而六月十一日神輿御幸をなして同十七日まで祭るあり

但此八幡の鳥井昔より木にて八幡社の石壇の下み立たりしをこの年より石鳥井に成

一大照院の堂塔清涼院と云也前青松院高月院二箇寺ハ泰巖院様の清高の二字を取て二箇寺の頭字にして兩院御建立也其後吉元公の御嫡子清涼院殿ハ御法號に當るを以夫より清松院と號實際寺ハ青雲院殿御逝去に依て寺領を

被下改て道樹院と號道照の道を取て寺號の頭に被仰付候あり

一遊行上人四十三世其阿菟鶴江よて詠歌

代々を経て替ぬ色ハ友鶴の入江の松ハ契りてそ榎

一隆景公八月十五日夜の御詠歌

治れる世々社仰け九重の今宵の月を見るに付ても

一廣家様御詠歌

百鋪の砌や今宵久堅の月の光を猶照すらん

一御前様御詠歌

まきもハの檜原の外山春來てハ立や霞のよそよ成行

一毛利甲斐守様御孫右京大夫様御十三歳よて元旦の御詠歌

春といハハ野邊の千種も若緑去年降雪のけふハ消つハ

一吉廣公御舍弟監物様ハ松平兵部大輔様御養子にて鳥越の御屋敷へ御部屋

住よて被成御座候處兵部様御氣に不相申事有之候哉監物様御亂心御座候故御相續不被爲成別に御養子をなされ監物様を御押込可被成との御事に付彼御方より御老中方へも右之御内意被仰出之由に候此段此御方は聞召兵部様え御詰付有之其節此御方江戸詰之御家老毛利市正殿國司與三兵衛也監物様御亂心少も無之段儘よ此御方聞とめされ兵部様との御出入よ相成申候よ付兵部様御氣よ不相應事有之候者夫迄にて此御方へ被差返候様よとの御事よ候得とも左様も不被爲成候由候處に此御方より國司與三兵衛を以委細よ御書付を以殿様よりの御書付よ不及天下之御老中御月番阿部豊後守様に持參被仕段々御直々様子被申上自分よりも被差上監物様を御方へ御返し被下候様よと御下知を奉頼候無左候ハハ大膳太夫家中押掛取返し可申にて可有御座候此段被聞召被下候様に少も監物病心に無之段も委細に公儀え被聞召分にて御下知を被加此方へ御差戻候様にと兵

部様え被仰渡此御方へも其段御沙汰有之に付て元祿十二卯六月二日の夜九ツ時分櫻田御上屋敷へ被成御歸候此時爲御迎兵部様鳥越之御屋敷へ毛利市正を被遣其外數多の御人數を被遣候左候て六月四日にハ麻布御屋敷被成御越候段々御人數を付候て御安心被成御座候此事ハ五月廿日比よりの事よて六月二日此方へ御取返被成候其節御手柄之取沙汰江戸中に有之候此儀萬端國司與三兵衛働無比類事よて其節之首尾縱彌異議及申込も殿様の御身躰少も掛不申與三兵衛身柄をつふし申込ふて相濟候様御公儀向を沙汰被仕置之此段旁其節無類之家老と江戸中沙汰有之候段々此方何事も思召通よ公儀向相成申候依之其節與三兵衛儀千石の御加増として七手付開作地拜領被仰付其節吉廣公監物様を御同道よて御老中御廻禮被成候總て天下向之儀簡様よ養父より疵付候てハ御身柄貳度世上之勤不相成事に候得共御病心よて無之段無疵之通を被仰立首尾能公儀向被聞召分候故

右之通御老中を御勤被成候夫より以來兵部様御家を御不通被遊候此段をも公儀へ被仰出置候根本兵部様沙汰不出來之御人柄よて物に御飽安き御生付之由也監物様も御甥之沙汰は候得共右之分也其後彼方へハ大炊様を御養子に被成候也監物様惡敷被聞召たるにてハあけれども其節大炊様是も甥子様にて御氣ふ入候故不圖急に右之通の御心持出候由是を以みれハ却て兵部様御亂心よて中々兼々思召立よて如此

一熊野帳ハ元和七酉の歳より寛永元甲子の年迄四年の内防長兩國の御物成を折合せ拌よして石高定の由也依之熊野檢地共云然共地方の檢地よてなく年々の御物成四年の分を折合を御帳を改るに依て熊野帳と云

一元就公藝州郡山へ御移り不被遊以前ハ坂の上と云所ハ御住居被遊候由此所ハ廣島より四里半餘有之所あり郡山へハ廣島より拾五六里有之石見國境よて有之由藝州四萬里の宿にて古老の咄也と云

一藝州三原の城ハ小早川隆景公御築被成候小城也西の丸と本丸の間海迄堀切よて有之と相見郭輪貳ツに分れ堀水海に續く陸通りよてハ此段不相見候船にて見し御堀石垣際船着浪也又隆景公備後よ初て御打入被成候節被成御座候處を沼田の御館と申候由是ハ三原と本郷との間道より少し左の方よひき、山あり廻りに古城残りて今に有御館の跡ハ田地よて有之由此所本郷よりは東也右の小山の名を夫以來御館山と云也此所夫迄ハ安藝の内御館山のさきに頓て備後安藝の境有之道中ハ細き溝を堀て有之也

一隆景公沼田の御館より大渡り川の古高山よ御城を御築被成候沼田御館有所より程近し壹里の内也往還より左の方也然處よ此上女山の由にて又新高山へ御城を被替候男山の由此貳ツの山同し高さ也此二ツの山の間を右に云大渡り川流れ出る也此二ツ山大山よとて不續離れ山也川水ハ奥より遠く流れ出る也砂川也三原の城際へ流れ出海へ流れ入也川上へ十里程船

登り申由川上遠き故所々にて川の名替り申候右の御城の所ふてハ大渡川
と云常に假橋掛りて有之淺き川也古高山を以上ハ水湧出申所有と也新高
山の御城を又今の三原御替被成と也三原の石垣の石をも彼所よりも被遣
たるとなり新高山の郭の跡成程堅固よても今有之四十段餘只今にても壁
其まゝ懸り候様に有之由大渡り川幅壹丁程有之古高山と新高山の間は計
の切目あり又右の高山より南の方に一里有之候て米山寺と云て隆景公上
方より被召連候其言宗の御祈禱所有之其節ハ寺領千石計被成御付候由今
寺斗有之隆景公の御影あり御供の追腹の衆廿人の石塔も今に有之所を納
所村と云又前に云新高山御城跡の山上ハ隆景公の御廟所とて少成所有其
内に御木像あり馬は被爲召たる御影あり其馬の轡明珍轡掛り候て有之由
其轡を山人とも取出し持あそひ幾度も下の川へ沈め候得共度々浮上り申
候誠ハ奇妙也其上左様のあるさ仕候者共には御たゞり有之毎々怪我し御

座候故如元納置申候此外にも隆景公の御墓所奇妙の事多きを以て生神と
崇めし右元就公御在所坂の上と云所にて麻々藝州田萬里村の宿主古老の
嘯よて一夜物語仕候所の名の文字承候故書付假名を付置候事

一享保五子の年春毛利讃岐守様に御増石高之御願天下え被仰上相濟候上被
進候此内者下の關不殘御本手領に被仰付又前大津にて甲斐守様以來之處
を如古來不殘附被進候是を御增高と此節御唱へ被成候往古より御分地の
外を増被進高にてハ無之候此度之御沙汰之御增高共ハ古帳不殘被進之分
右高四萬七千三百四十石餘と御書付を以被仰出候也古き寫ハ古帳三萬六
千石と有ハ少く相違なり

一前書に有之御一門の事御六家にて近代益田福原兩家を添御八家と云事其
子細無之御一門ハ御六家と極り申候夫依様といふ様
る當家は殿と云益田福原ハ御當家兩家
老と云家あり依之益福を御一門に八家と云て入る事一向無之八組の事ハ

元六組を御六家へ何その時ハ被仰付成候也残る貳組ハ元江戸組格別に有之候を大組六組同前ヨ被仰付八組ヨして押込ヒ江戸詰被仰付候也八組にして八家へ御添被成の御法よてハ無之御六家の外にて益福え被成御添事よてあきまり

一先手御當家の御判物天下御代替に付御老中御認被成候付堅田安房益田孫右衛門並口羽又兵衛之も被相添持參被仕御老中御次之間にて被罷居候由左候て御判物御披見被成御目錄奉書をも御披見して松平伊豆守殿被仰よハ井伊掃部殿各計にて判形無之ハ如何様の子細にて候哉と御尋候へハ益田孫左衛門被申候ハ侍従様御事大坂陣にて御手を負せられ御病氣中にて御座候故御判不被遊候やらんと承候と御答被申上候へハ成程其由にて可有之と被仰候との由

一お南様御時代ヨ御番衆所持之金ハ無垢のかうらい失候處其節佐世與三左

衛門御右筆よて罷居候付新參故此仁取候哉沙汰有之候て自分も聞上よも少々其沙汰被聞召の由に候へ共與三左衛門事も先何とも諸人ハの申譯も難成堪忍仕居申候然處ヨ其時分御前之被召仕候猿有之是を御飼者被成候て如斯御座敷をありヨ申或時右之猿御家の破風口よて鏡を見申を人見付候て其所へ人を被遣様子を御見せ被成候へは右のかうかい有之候扱其鏡ハかうかいより以前是も御前様之鏡失候て見へ不申候其鏡也其外色々の物を取候て右の所ヨ置之由是よてれのつから與三左衛門身ハ上晴申の由此與三左衛門後に宗孚と申候也

一堅田大和殿妻ヨ同安房殿玉樹院殿江戸ヨ爲證人御座候時分牧野佐渡守殿と右一同に御山の事あり然處に佐渡守殿御座敷以外手輕き事にて八疊の間三ツ其頃ヨ廿疊程の座敷有之夫ヨハねこ口有之たる由御會釋ヨ押入の柵有之夫より白き餅を丸盆に入御次の間にて女郎衆焼候て夫を御差出候

御庭にて小袖のわり物を仕居之由安房殿御歸御咄のよし也
一輝元公或時秀就公の御居間へ被成御出候て御座敷内被成御覽候節御物置
の戸を御明け被成候へハ夜着棚の上に絹の御夜着蒲團有之候へハ御覽被
成候てさて〜藤七ハ果報の生付なり身ともハケ様の物不持ふとん壹ツ
を持候と被遊御意候由

右長門金匱ハいかある人の作ありとや詳あらずさ
れどそのなかのかきさまを閲するよおのつからふ
るき代のものでところ知られたり予むかしある學友
の許より是書を借來りそのふることを考ふるによ
りたより多けれハ幸よ一本を淨寫せり而してこの
本ありふし處々ハ傳はりたれともいつれも互ハ誤
謬多きに依り往年中村雪樹翁收藏の委心帳のうち
に就きて之を訂正とまた深く疑義に涉り更に解し
かたきものを刪去れり然るに猶ほ錯誤あるを免れ
されハその餘ハ概ね舊本のまハに従へりいにしへ
の學者も書を校するハ落葉を掃ふか如と云ハれ
たり閱覽の諸君この意を諒せられんことを祈る明

治辛卯紀元節の後五日柳外書屋の南軒に於て看雨
隠士あるす

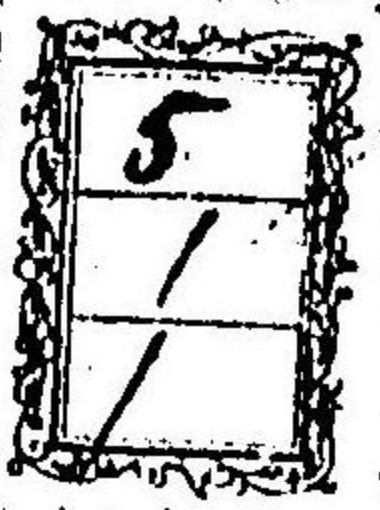
明治二十四年二月二十五日印刷
明治二十四年二月二十六日出版

編輯者 山口縣士族 村田 峯次郎

發行者 東京府士族 稻垣 常三郎

印刷者 東京府士族 堀田 道貫

同京橋區山下町
二十二番地



東京市四谷區坂
町七十二番地

同神田區淡路町
一丁目一番地

